

令和5年～6年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究(2年次) 生活科・総合的な学習の時間 授業研究会 活動記録

1 基本情報

- (1) 研究主題：共創力を発揮し、自己を高める子どもの育成
～地域との協働、AAR サイクルを手立てとした生活科・総合的な学習の時間の授業改善を通して～
- (2) 教科：生活科・総合的な学習の時間
- (3) 期日：令和6年1月1日（金）
- (4) 会場：新潟市立白山小学校

2 研究の概要

1年次は、「共創力を発揮し、新たな価値を見出す子どもの育成」を主題として研究を進めてきた。その結果、AAR サイクルの活用や教師側からの視点提示により「新たな価値」（新しい気付きや概念的な知識、新しい思考方法や表現方法等）に気付くことができた。しかし、児童自ら「課題を解決したい」という思いをもち、追究していく姿勢に弱さが見られた。そこで2年次は研究主題を改め、「共創力を発揮し、自己を高める子どもの育成」と設定し、単元を通して地域の方と協働していくことにより、課題意識・目的意識を継続させ、児童が主体的に取り組むことができる授業づくりを目指した。また、AAR サイクルの授業内・単元内での有効な位置付けを探っていくことにより、児童が自分の気付きや知識を更新していく姿（自己を高める子ども）を目指した。

3 授業の概要

- (1) 1年 生活科授業について
- ①授業者：高橋充子 中村薫子
- ②単元名：「あきと あそぼう」
- ③概要：

第1小単元「秋を見つけよう」では、校庭で秋を見つけ、自分が気に入った秋の自然物を集めた。本時は、

集めた秋の自然物を使っておもちゃを作る第2小単元「見つけたもので作ろう」の3時間目であった。

前時まで各クラスで秋のおもちゃ作りに取り組んできたが、「もっと楽しく遊びたい」という児童の願いから、2クラス合同での学習を行った。

学習課題を「秋のおもちゃでもっと楽しく遊ぶにはどうすればよいのかな」と設定し、前時の振り返りカードを提示した。「どんぐりゴマがまっすぐ回らない」という困りごとを提示し、解決方法を「さくせん」と名付けた。「さくせん」には、「やり方」と「作り方」があることを確認した後、同じおもちゃグループでの活動を行った。

活動の始めに「相談タイム」を設け、困っていることを話し合ったことが、おもちゃを改良する「おもちゃタイム」で、児童が互いにアドバイスし合いながらおもちゃ作りに取り組む姿につながった。また、教師が活動を一旦止めて、各グループで出されたアドバイスを全体に共有することが、改良の新たな視点となり、黙々と個々で活動していたグループに対する支援に



もなっていた。児童は、友達のアドバイスを聞いたり、友達の工夫を真似したりしながら、じっくりとおもちゃ作りに取り組んでいた。

振り返りカードには、友達に教えてもらったことと、友達と一緒に考えたことを記入させた。この活動により、児童は自分のおもちゃに加えた改良を確認し、より楽しく遊べるおもちゃになったことを実感していた。

(2) 6年 総合的な学習の時間授業について

- ①授業者：長谷川拓海
- ②単元名：「白山未来プロジェクト」
- ③概要：

6年生児童は、5年生までの学習で身近な地域の魅力に触れてきた。6年生では、地域の魅力を生かしながら様々な地域課題の解決に取り組む学習を行っている。児童はそれぞれの興味・関心に沿って分野（医療・福祉・町づくり・商業・スポーツ）を選択し、まず、白山小学校の児童を対象として「自分たちだけで解決を目指す課題（Lv1）」に取り組んだ。



本時では、児童がそれぞれの分野で行った校内での取組のアンケート結果を授業の初めに提示した。その結果から、「このままのやり方で、Lv2（地域）の活動もできそうだろうか」と問い合わせ、「活動を地域に広げていくために、どのようなことが大切なのか」と、本時の学習課題を設定した。

課題を解決する手立てとして、3回の話し合いの場を設けた。同分野で活動を振り返った後、他分野のメンバーと意見交換を行い、再度同分野で話し合うことにより、様々な視点から課題解決に向けて考えることができた。

児童は自分たちの活動や取組を振り返り、活動から得た考えを述べ合っていた。話し合いを進める中で、「地域での活動は、対象となる人の立場や年代が異なる難しさがある」「相手のことを想像しながら計画を立てていく必要がある」等、自分たちの思いだけで進めるのではなく、相手の思いを考えていくことが大切であることに気付くことができた。

AARサイクルにおける本時の位置付けは、「自分たちだけで解決を目指す課題（Lv1：校内の活動）」の振り返り場面（R）から、「地域や家族の協力が必要となる課題（Lv2：地域での活動）」への見通し場面（A）であった。児童は、校内の活動で振り返ったことを地域への活動に生かしていく意欲をもつことができた。

(3) カタリバについて

- ①参加者：6年生児童、地域の方、保護者、研究会参会者
- ②テーマ：「よりよい白山地域をつくるために大切にしたいこと」
- ③概要：

6年児童と地域の方、保護者、研究会参会者で一つのグループを作り、上記テーマについて話し合いを行った。話し合いは、グループのメンバーが入れ替わるワールドカフェ方式を取り入れ、進行と記録は6年生児童が担当した。異なる立場の方々から様々な意見が出されたことで、児童は新たな視点をもって白山地域について考えることができた。児童は、「カタリバで話し合ったことを『白山未来プロジェクト』に生かしたい」と、次の活動への意欲をもっていた。



4 研究の成果

【シェアリングタイムより】

○1年生 「生活科」

- ・生活科では、「活動に浸る」ことが大切である。活動に浸る中でかかわりが生まれ、活動が深まっていく。
- ・互いにアドバイスし合い、主体的に活動する様子が見られた。
- ・振り返りには、「今日できたこと」や「楽しかったこと」も書かせるとよい。

○6年生 「総合的な学習の時間」

- ・失敗体験や成功体験を共有し合い、分野の違うメンバーとグループを作ることにより、活発な話合いが行われていた。
- ・活動後にアンケートを取って参加者の意識の変化を見取り、結果を次に活用していくことが必要である。
- ・児童だけ（同質）の話合いでは、新たな考えは生まれない。他者の視点が必要であった。今回の場合は、「カタリバ」を開催することで、他者の視点を得ることができた。

【関西大学文学部 教授 岩崎保之様よりご指導】

○共創力について

- ・共創=目的の共有・役割の自覚・対等な関係
- ・1年生、6年生共に、「目的の共有」がきちんとされていた。
- ・「共創」とは、「顔の見える関係」を生かした学びの創生である。「カタリバ」において、「共創」が生かされていた。
- ・総合的な学習の時間の活性化は、地域との対話が鍵となる。

○AAR サイクルについて

- ・AAR サイクルは自己調整学習であり、学びを自分（自分たち）ごとにする子どもの姿である。1年生のおもちゃ作り、6年生の話合いにおいて、その姿が見られた。
- ・生活、総合的な学習の時間の魂は「探究」である。探究のプロセスは「想い・願い⇒不確定・不安→協働→安定・安心」。これは、AAR サイクルの「見通し・行動・振り返り」のサイクルとも重なる。
- ・探究は、答えが用意されていない「問い合わせ」に対して、正しいと思える「答え」を導き出す営みである。探究の経験が、子どもたちの生涯の学びを支えていく。
- ・日々の学習のめあて（課題）を「問い合わせ」の形にして、学習に取り組んでほしい。

ご意見、ご指導から、共創力を発揮するために、「活動に浸る・対象とじっくりかかわる・他者と目的を共有し、協働する」ことが大切であることが改めて明確となった。今後は、AAR サイクルを取り入れた学習プロセスを検証し、「自己を高める子ども」を育成するために、更に研究を深めていきたい。